

<p>唐津市大浦浜地先におけるマナマコ増殖と漁獲量との関係 永瀬りか・金丸彦一郎</p> <p>大浦浜地先ではマナマコを対象として1996年に漁場造成と、その後継続して外敵の駆除、種苗放流を実施しており、その効果を把握するため検討を行った。</p> <p>同地先でマナマコ漁獲量は徐々に増加し、2012年には最大の6トンとなった。一方、2013年夏季に発生した極度の貧酸素状態の影響と考えられる漁獲量の大幅な減少もみられた。2014年以降には漁獲量とC P U Eが増加傾向となっている。</p> <p>今後とも、種苗放流などの増殖施策の効果指標として継続して情報を把握していく必要がある。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報9 (1-4) 2019</p>	<p>貧酸素条件下におけるマナマコ稚仔の生残について - I 福元 亨・重久剛佑</p> <p>放流サイズのマナマコ稚仔の貧酸素耐性を明らかにするため、貧酸素暴露試験を行なった。</p> <p>水温26℃または28℃でD0が10%の条件下において、体長10mmのマナマコ稚仔は、5.5～6時間で半数がへい死し、8時間後には全滅した。試験結果から、極度の貧酸素状態が5～6時間継続すれば、マナマコ稚仔の生残に影響を及ぼすことが明らかになった。</p> <p>このことから、2013年夏季に大浦浜地先の底層のD0が10%未満で8日間続いた極度の貧酸素は、その海域に生息していたマナマコに対し大きなダメージを与えたと推察される。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報9 (5-8) 2019</p>
<p>アカウニの身入りと呈味特性に及ぼす給餌海藻の影響 豊福太樹・吉田幸史</p> <p>アカウニ養殖における生殖巣の品質向上をはかるため、生のアラメ、マコンブと乾燥マコンブを、それぞれアカウニに給餌し、身入りと呈味に及ぼす影響を比較した。</p> <p>その結果、生殖巣指数はアラメ区が他の2区よりも有意に高かった。官能評価では、アラメ区とマコンブ区で評価が高く、乾燥マコンブ区で低い結果となった。遊離アミノ酸分析では、アラメ区とマコンブ区では、乾燥マコンブ区よりも甘味と旨味値が高く、苦味値が低かった。</p> <p>本結果から、アカウニ養殖用餌料としてのアラメの有効性が示唆された。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報9 (9-13) 2019</p>	<p>ケンサキイカ稚仔が捕捉する動物プランクトン種 豊福太樹・大隈 斉</p> <p>孵化初期のケンサキイカ稚仔が捕捉する動物プランクトン種を把握するために、孵化稚仔の飼育試験を行った。稚仔は孵化後8日間において、約5～10mmのアミ類、1～2mm程度のヨコエビ類とカイアシ類ハルバクチクス目を捕捉し、その中でもアミ類への捕捉頻度が高かった。また、アミ類は稚仔の胃内へも高頻度に取り込まれた。</p> <p>本結果から、稚仔飼育の餌料に用いる動物プランクトンとしては、捕捉が確認された動物プランクトン3種の中でも特にアミ類が重要であると考えられた。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報9 (15-18) 2019</p>
<p>温排水影響下における潮干帯生物の変遷 - II 伊藤 毅史・藤崎 博</p> <p>2008年から2017年にかけて、潮干帯の付着生物のうち植物の変遷について、2010年から2011年の全号機運転停止により温排水が放出されなくなった前後について影響評価を行った。</p> <p>その結果、夏季および冬季ともに、放水口周辺で大型褐藻類や小型褐藻類などが増加傾向にあることがわかった。また、2008年に発電所周辺の潮干帯生物調査の定点の見直しを実施したが、今回の結果から、見直し後の定点でも、発電所の稼働期から停止期における潮干帯生物の変遷を十分に捉えることができていた。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報9 (19-24) 2019</p>	<p>対馬東水道及び周辺域の鉛直断面からみた水温躍層の形成状況 永瀬りか・金丸彦一郎</p> <p>漁海況予測のための基礎資料とすることを目的に対馬南西域～対馬東水道～壱岐水道の鉛直断面から水温躍層の形成状況等について検討を行った。</p> <p>その結果、対馬東水道及び対馬南西部においては、7月から水温躍層の形成が始まり、8、9月にその躍層が最も顕著にみられた。その後、10月から水温躍層が解消され始め、1月には水温はほとんど均一となった。また、対馬南西部の底層では対馬東水道の底層にはみられない約11～15℃程度の水塊がほぼ周年みられた。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報9 (25-29) 2019</p>

<p style="text-align: center;">唐津湾における底質と底生生物（ノート）</p> <p style="text-align: right;">伊藤毅史・藤崎 博</p> <p>2015年の9月に唐津湾の54定点で実施した底質および底生生物調査の結果について、1989年および1998年の調査結果等との比較検討を行った。</p> <p>その結果、1998年には湾西部、高島の南側および神集島の南東側で泥質、湾の中央部および湾奥部東側に砂質であったが、2015年には高島と大島間の海域で砂質、湾中央部で泥質に変化している状況が確認された。</p> <p>唐津湾では、クルマエビ、ヒラメおよびカレイなどの底魚類の漁獲量減少が著しい状況である。</p> <p>今後とも、定期的に唐津湾の底質環境を調査するとともに、底質環境と有用魚種の漁獲量減少との関連についても調査していく必要がある。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報9（37-40）2019</p>	<p style="text-align: center;">佐賀県唐津港におけるハタ類5種の水揚量 ～クエ、キジハタ、マハタ、アオハタ、アカハタ～ （ノート）</p> <p style="text-align: right;">堤 裕紀・藤崎 博</p> <p>佐賀県玄海地区における、クエ、キジハタ、マハタ、アオハタ、アカハタ等のハタ類5種の水揚げ状況を取りまとめた。</p> <p>2008年から2017年まで10年間のハタ類5種の水揚量は、6.9～29.8トンで推移し、2016年が29.8トンとピークとなっていた。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報9（41-44）2019</p>
<p style="text-align: center;">佐賀県における沿岸漁業へのICT技術導入の取組 （ノート）</p> <p style="text-align: right;">伊藤毅史・藤崎 博</p> <p>沿岸域で操業する漁業者が操業中またはその前後に操業現場で海洋観測を実施する「漁業者参加型の海洋観測網」の構築に向けた取組について紹介する。</p> <p>2017年には、水温・塩分および潮流観測データを収集するシステムを構築した。2018年からは、漁業者による海洋観測データがクラウドストレージに転送され始めた。さらに、2019年1月からは、その観測データが高精度海況予測に同化され始め、今後の海況予測の更なる精度向上が期待される。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水産セ研報9（45-48）2019</p>	